

北海道における地域コミュニティの活性化に向けて ―地域課題の解決に向けた新たな共創の取り組み―

第5回

地域の誰もが気軽に集えるサロンづくりを目指して ―大学生地域福祉コーディネーターの活動から―

社会福祉法人 函館市社会福祉協議会 事業部事業課地域福祉係 主任 辻村 絢

1 はじめに

近年、核家族化による高齢者等の地域社会の孤立に伴う孤独死・引きこもりの深刻化により、地域における助け合いや支え合いができるつながりの希薄化が課題となる中、函館市社会福祉協議会では、2012年に地域と住民がつながる仕組みとして「地域福祉コーディネーター」を配置しました。2年ごとに3つのモデル地区を指定し、多世代が集い、交流ができる拠点づくりといった、より発展的な地域福祉活動を展開しました。

6年間のモデル地区指定期間終了後は、検討を重ね、全てのモデル地区から誰もが気軽に集えるサロンを設立した経緯から、集いの場を求める住民のニーズの高さを把握することができました。それを受けて、2019年に、小地域における地域福祉ニーズに対応する「地域づくり活動支援事業」を開始しました。

事業については、主にサロン活動支援を取り組みの軸とし、市内で活動するサロンの支援や、社会福祉協議会直営サロンを運営モデルとして市内5か所にサロンを開設し、地域福祉コーディネーターと地域住民が一体となった活動を実施することで、地域共生社会の実現に向けた取り組みを進めています。

2 地域福祉コーディネーターの役割

地域福祉コーディネーターは、市民による有償ボランティアで、2025年度は町内会長やケアマネジャー等の地域活動経験者の4名に委嘱しています。

主な活動については、函館市社会福祉協議会で運営する市内5か所のサロンを担当する他、地域の身近な存在として市内全域で行うサロンづくりの活動支援、また、活動中での困りごとやニーズを把握し、専門家や機関へつなぐことが役割となっています。

そして、調整役として函館市社会福祉協議会職員とチームを組んだ相談対応や、地域関係者と連携したネットワークづくりを担っています。

3 サロンづくりについて

サロンづくりでは、住民が主体となるサロンの新規開設を検討する各種団体に対して、活動のきっかけとなるサポートを行っています。

人と人とのつながりを絶やさず、地域で誰もが気軽に参加し、多くの世代が交流することができるよう、サロン未実施地域の関係者へ函館市社会福祉協議会直営サロンをモデルとして見学を受け入れることで運営イメージを掴んでもらうことや、企画内容や運営を学ぶことができる研修会を実施し、サロンの新規開設に対しての不安感を解消することで、活動を始めやすい支援体制を強化しています。

また、地域福祉コーディネーターは、実際のサロン活動を行う現場や視察等で培った経験を活かし、新規で開設するサロンには、立ち上げ前からサポートに入り、軌道に乗るまで企画・運営の継続的支援を行うことや、既存サロンが抱える課題に対して意見や情報交換等を行い、必要に応じて助言をすることで課題解決に向けた支援と、サロンを通じた地域づくり活動にも取り組んでいます。

4 学生によるサロンづくり

2023年に「地域福祉コーディネーター活動」に新風を吹き込むため、北海道教育大学函館校のご協力により、初めての大学生地域福祉コーディネーターを委嘱しました。

企画運営のノウハウや課題が代々受け継がれて運営される地域交流サロン「こんにち輪」では、委嘱を受けた歴代の大学生地域福祉コーディネーターの、大学生ならではの柔軟な視点から生まれる企画と活力に満ちた主体的な活動が地域住民から好評であり、大きな支持を得ており、地域における多世代交流の促進が図られています。

現在は、2名の大学生地域福祉コーディネーターが毎月の企画から準備・実施までを主導で行い、他の大学

生とボランティアの協力を得ながら参加者が楽しめるレクリエーションや季節に合わせた工作・催し等を組み合わせ実施しています。

その他にも、市内サロンへ足を運び、地域課題を把握した上で、大学生からの新たな観点で対策を考えることや、運営する「こんにち輪」にも企画や課題についての解決策を見出して活動を進めています。



サロンで使用する道具作りをする様子

5 地域へ出向く

大学生地域福祉コーディネーター：佐藤 夏鈴

地域福祉コーディネーターに就任してから、自分たちが企画・運営する「こんにち輪」以外に8つのサロンへ視察に伺いました。それぞれのサロンに参加する中で、全てのサロンには共通しないにしても、複数のサロンにおいていくつかの共通点がありました。

第一に、サロンが交流の場としての機能を持つという点です。体操やディスコダンス、ゲーム、カラオケ等活動内容は異なりますが、いずれも単なる「運動・娯楽」ととどまらず、サロンが参加者同士の交流の契機となっていました。

第二に、地域住民が主体となって運営しているという点です。専門職や外部講師等に依存せず、地域住民自身が考案したゲームを行ったり、地域住民自身が他で学んできた体操やダンスをレクチャーしたりしているサロンが多くありました。そのようなサロンでは、活動内での参加者の主体性がより表れていたように思います。

第三に、全てのサロンにおいて、ゆるい体操やディスコダンス、カラオケの歌に合わせた自由な踊り等の「身体を動かす」プログラムが組み込まれていた点です。どのサロンでも参加者に合わせた内容で、参加者にとっ

て無理なく楽しみながら身体を動かす仕組みが意識されていました。ただし、あるサロンを例にすると、ディスコダンスに参加しない人もディスコダンスの音楽を聴くことや他の人が踊っているのを見学することを目的にサロンに参加していました。このように、参加の仕方を柔軟に許容している様子も見られ、気軽に参加できる工夫があったと思います。

そして第四に、運営の中心にいる人をはじめ、参加者たちが課題感を持って活動しているという点です。「暑さや体調不良を理由に参加者が減っている」や「前回（少し前）より人数が少ない」という声が各サロンで出ていたことから、参加者の維持はどのサロンでも気にしていたように思います。参加者数の維持という点で、「競う」という要素を企画に取り入れているサロンは、特に効果が大きいのではないかと感じました。中でも簡易ルールから本格的なルールまで多様な遊び方ができるモルックやカーリンコンといったニュースポーツは、男性参加者の活躍を引き出すのに有効であったように思います。よく男性高齢者の参加率の低さが課題として挙げられますが、「競う」という要素やゲーム性を持たせることは、男性高齢者の参加率向上に貢献できそうだと思います。時には景品が用意されているという工夫が伴うと参加者の意欲向上にもつながっているように感じ、そういった工夫があることで、楽しみながら継続して参加してくれる人もいるのではないかと思います。



市内サロンに参加する地域福祉コーディネーター

その一方で、参加者のニーズに関しては少し違いがありました。「若い人にどんどん参加してもらいたい」という声があったサロンと「現状に満足している」というサロンがあり、世代を超えた交流を望むところもあれ

ば、同世代での交流や現参加者間での娯楽やコミュニティを重視するところもあったと思います。この点は、どのような場を作るかは、参加者の声をしっかり聞き、ニーズを把握することが大切だと改めて感じた部分でした。

これらの共通点や相違点を踏まえると、サロンには活動そのものを楽しむという価値の他に、「自分の経験を活かす場」や、「参加者同士の交流」、参加者同士が気に掛け合う「見守り機能」等といった価値があるということに気づきました。

こうした活動を通して見えてきた地域の課題は、サロン参加者数の維持・拡大の難しさです。高齢者自身の体調（足腰等の痛み）や季節的な要因（雨や暑さ等）により、参加者が減少することはどのサロンでも見られました。参加者の減少によってサロンが消滅してしまえば、「つながり」の減少にもなり、地域における孤立・孤独が進んでしまう恐れがあります。特に函館では今後、85歳以上の高齢者の単独世帯の増加が見込まれています。「つながり」があることでフレイル*の予防や長生き、認知症リスクの低下につながるというデータがあることから、「つながり」が減少すれば、様々な課題が顕在化してくると予想されます。そのため、サロンという「つながり」の場を維持していくことは喫緊の課題だと考えます。また、「若い人にもっと参加してほしい」という複数の声があり、参加者を多様化させたいという思いはあるものの、なかなか進んでいない状況が伺えました。多世代交流の場は、高齢者が役割を持って生き生き活動ができるという利点や、一方的に支援されるだけではない相互的な関係性が生まれることから、高齢者が自尊心を保って自分らしい生活を送ることができるという利点があることが研究結果からわかっています。高齢者だけでは維持が難しいサロンも多世代が知恵や資源を持ち寄って作り上げることができれば、持続可能な地域の「つながり」の場として機能し続けられるのではないかと考えます。

こうした課題に対応していくためには、子どもやその親世代、地域の全ての人々が気軽に参加できるようなコミュニティを作る必要があると思います。地域の居場所として確固たる土台ができれば、その中で高齢者がサロンを開催したり、そのサロンにいろいろな人が関

わったりして「つながり」の場を維持していくことができるのではないのでしょうか。私たちのような学生地域福祉コーディネーターやボランティアとの交流の場を増やし、一緒にサロン運営についてアイデアを出し合ったり、時には地域行事との連携を図ったりしながらサロンの持続可能性について話し合いの場を設ける取り組み等が必要だと考えます。

6 今後に向けて

大学生地域福祉コーディネーター：島 麻依

地域福祉コーディネーターとしての活動を通して、地域におけるサロン活動や住民の居場所づくりについて理解を深めていく中で、私たちが共通して目標としているのは「誰もが気軽に集まれる場所を作ること」です。

近年、住民同士の支え合いの関係が希薄化しつつある中で、人と人が関わる機会をどのように取り戻していくかが大きな課題となっています。そうした状況に対応し、地域全体の力を高めていくためにも、子どもから高齢者まで、世代を超えて様々な人がつながりを得られる場づくりを進めていきたいという思いが活動を通して次第に強まってきました。

活動当初は、右も左もわからない手探りの状態でサロンを進めていました。どのような内容にすればいいのか、参加者とどのように関わるべきか、わからないことばかりでした。しかし、参加者やボランティアの方々と関わりを重ねていく中で、サロンを作るのは運営側だけではないということに気づきました。場を形づくっていくのはそこに集まる人たち一人ひとりであり、その関わり合いを通じて居場所として温かさが生まれていくのだという実感を得ることができました。

こうした学びをどうにか形にしたいと考え、初めての試みとして地域の子どもたちを呼んで皆で楽しめるイベント「こんにち輪文化祭」を実施しました。これまでのサロン活動では、参加者の方々に「どんなことをやりたいですか」と意見を聞いて内容に取り入れたことはあっても、準備物の作成やサロン当日の進行は基本的に地域福祉コーディネーター主体で行っていました。しかし、今回は文化祭で使用する準備物の作成を、サロンの活動時間を使って参加者と一緒に行いました。紙を切ったり、ボールを作ったりといった共同作業を通して、参

* 加齢により心身が老い衰えた状態のこと。

加者同士の自然な会話や笑い声が生まれ、これまで以上に皆でこの場を作っているのだという一体感が生まれていました。文化祭当日は、普段の私たちが中心となって行う活動とは異なり、参加者の方々がそれぞれブースを担当する立場として、地域の子どもたちを迎え入れました。学生ボランティアが参加することはあっても、小さい子どもたちが参加することが今年度の活動ではなかったため不安もありましたが、輪投げや紙飛行機大会等では、子どもたちが目を輝かせながら楽しむ姿や、参加者の方々が笑顔で声を掛け合う様子が沢山見られました。参加者はブースの担当をしながらも他のコーナーを回って交流する方が多くいて、そこには世代を超えた自然なつながりが生まれていました。また、参加者に明確な役割を設けたことも意欲的な参加につながり、一人ひとりが生き生きと活動する姿につながったように感じます。これまで運営側が準備したものを行う活動形態だった中で、参加者の方々がブースの運営をしたり、趣味のものを持ち寄り、絵や写真、服やぬいぐるみ等を展示したり、紙飛行機大会を行ったりと、それぞれの「好き」や「得意」を活かし主体的に「場を支える側」として活躍されていたことは、「こんにち輪」の活動における大きな変化でもありました。



こんにち輪文化祭の様子

今回の取り組みを通して、改めてサロンという場は、運営者だけが作るものではないということを強く感じました。集まれる場所があり、そこに集う様々な人たちがいて、そしてその一人ひとりが互いにに関わり合うことで、地域の未来へとつながっていくのだと思います。

地域福祉コーディネーターとして視察や実践を重ねる中で見えてきたのは、いつまでも元気な地域を目指す

ためには、人と人との「つながり」をどう育てていくかが大切だということです。特に今後は、世代を超えた交流が自然と生まれるようなサロン活動がより一層求められていくのではないかと考えています。高齢者だけでなく、子どもやその親世代、地域の若者等、様々な世代が関わることで、新しい発見や学びが生まれ、地域全体の活性化につながっていきます。年齢や立場を超えて互いの存在を認め合いながら支え合う関係が育つことが、これからの地域にとって重要な鍵になると感じています。文化祭という新たな取り組みは、私たちにとっても企画や準備、当日の運営を通して多くの学びを得ることができました。地域の方々と協働しながらサロンを作り上げていく中で、互いに支え合う関係の大切さを実感し、また自分たちがその一部になれていることの喜びを感じました。

今後は、今回の取り組みで得られた経験を活かし、地域住民誰もが参加しやすく居心地のよい居場所となるようなサロンづくりを目指していきたいと考えています。そして、大学生という目線からのアイデアやつながりを活かし、引き続き楽しいサロンを作っていけるよう、地域の方々とともに地域福祉活動に取り組んでいこうと思います。

7 おわりに

2020年に流行した新型コロナウイルス感染症拡大から、様々な活動の中止が余儀なくされ、人とのつながりの希薄化が進んだことにより、サロンの担い手となるボランティアの高齢化やモチベーションの低下、さらには少子高齢化等の担い手不足によって若い世代の地域活動離れが加速した影響から、サロン活動の維持が困難な状況になる中でも、現在の地域社会では人と人がつながる居場所が必要とされています。

函館市社会福祉協議会では、大学生地域福祉コーディネーターという、新たな視点から若者が継続して地域参加をし、活動に関わることで新たな活動の担い手を発掘する仕組みづくりを進め、併せてつながりの希薄化が進む地域にサロン開設のアプローチを行い、停滞した活動を拡大させ、より人と人とがつながる居場所づくり活動の促進と、キャッチしたニーズを地域福祉コーディネーターが専門家や機関へつなぎ、解決に向けた支援体制を強化していきます。